

# 令和2年 **3**月の大阪森林便り



## 今月の木の話

### 能舞台の床板は木裏でなければ駄目

- \* 能の舞台の板は、木表を上にはありません。
  - ・ 板目材は木裏側に膨らむため、木裏を上にはすれば舞台全体が太鼓のようになり、役者が足を踏み鳴らした時の音響効果が非常に良くなります。
  - ・ 木裏使いをしているので木目が立ち、足が滑りません。
  - ・ 木材の樹脂は木表の方に出るので、木裏を上にはすれば舞台の手入れが楽に。
  - \* 舞台には絵松という、舞台の後ろにある松などを描いた板にも木裏が使われます。
  - ・ 木表はつやがあるため、その上に絵を描いても舞台のかがり火が映ってしまい見づらくなります。
  - ・ 木裏面はそれほどなめらかではないので、かがり火をたいてもあまり反射せず幽玄な雰囲気醸し出します。
  - \* 外部の鎧張りの板など板塀には、板の側面が跳ね上がらないので木裏を使います。
  - ・ 木裏使いにすると赤身部分の広がりがあるので、雨や露に強いという利点もあります。
  - \* まな板ははじめに木表を使い、木表が反ってくると真ん中が切りづらくなるので、木裏を使います。
  - \* 高級なまな板は平柂目（板の広い面が柂目）を使いますから、反りにくく表面が均質なので、木表木裏はあまり関係ありません。
  - \* 木表と木裏を使い分けるのは、ほとんど針葉樹の場合です。
  - \* 広葉樹は木表木裏はあまり関係はありませんが、樹種によっては光の反射率が異なるので気になることもあるようです。
- （日本林業調査会「木材に強くなる本」より抜粋・引用）



## (1) 合板、国産シフト進む

### 針葉樹、今年の生産最高 輸入品は最低

- \* 国産針葉樹合板の 2019 年の生産量は過去最高を更新。
  - ・ 住宅需要が底堅かったことや、店舗などの非住宅の需要増が背景。
- \* 輸入合板の入荷量は 1990 年以來、約 30 年ぶりの最低水準。
- \* 国産針葉樹合板の生産量は、前年比 3.6% 増の 3,200,239m<sup>3</sup> と 4 年連続で増。
- \* 輸入合板の 2019 年の入荷量は前年比 13.2% 減の 2,535,052m<sup>3</sup> で、減少は 3 年ぶり。
- \* 現在は、構造用合板が 9 割、床材に使うフロア合板も 3 割が国産。
- \* 合板分野で国産の占める割合は、2019 年は 56.7% と前年より 4.3 ポイント増。
- \* 輸入合板は 2020 年にさらに減るとの見方も。  
(2020 年 2 月 5 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

## (2) 国産の「大径木」価格低迷

### 50 年前に植林、伐採期迎える丸太

#### 和室の需要衰退 / 製材工場も減少

- \* 国産丸太のうち直径が 30 c m 以上ある「大径木」の取引価格が低迷。
  - ・ 2019 年の価格は 2002 年と比べて 3 割安。
  - ・ 和室が減り、需要が振るいません。製材工場の減少も一因。
- \* 日本の森林面積の約 4 割が戦後や高度成長期に造林された人工林。
  - ・ 50 年超の主伐期を迎えた割合は、今や半分に達します。
  - ・ 樹種は杉、桧、カラマツ、トドマツなど。
- \* 中丸太(直径 24~28 c m)は 2002 年比 8% 安。大径木は 28% も値下がり。
- \* 畳市場は 30 年前の 5000 万畳が現在は 5 分の 1 に縮みました。
- \* 建築用材は直径 16~30 c m の需要が一番多く、大径木は少ないのです。
- \* 大径木は使い道が乏しく、バイオマス発電の燃料用チップになるほか、低価格で中国に輸出されています。
- \* 1960 年に 24,229 箇所あった製材工場は、2017 年に 4,814 箇所まで減りました。

・「ツインバンドリー」といった直径 30 c mまでの丸太を無人でひく機械が主流。

\*大径木を合板に使う例も。

\*大径木の値下がりには森林所有者の資産価値の低下も意味します。

(2020年2月19日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

### (3) 輸入合板 3か月連続上昇 対日2月積み

マレーシアなど値上げ姿勢 採算悪化で減産調整

\*2月積みの価格は、塗装型枠用合板が11月と比べて約3%上昇。

\*国内の合板市場に占める輸入合板の2019年のシェアは約43%。

\*対日輸出価格の上昇は、長く続いた日本からの買い控えが主な要因。

\*2019年の輸入合板の入荷量は、前年比13.3%減の2,535,052m<sup>3</sup>で、リーマン・ショック以来の低水準。

国内価格は横ばい圏 五輪需要一服 荷動き低調

\*東京地区では、前年同月比4~6%安い水準とはいえ、2019年10月以降は横ばい圏で推移。

\*東京地区の生コンクリートの出荷量は、1月までで12カ月連続で前年割れ。

\*12月の新設住宅着工件数は、前年同月比7.9%減。

(2020年2月26日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

